

ルといふ名を初めて使つたか分かりませんが、ゲンジボタルの名が出来てから、出来たことだけは確でしょう。といふよりも寧ろゲンジボタルの名が、ヘイケボタルの名を生んだのでしよう。

以上のゲンジボタル、ヘイケボタルの名の生れた道程は、全く私の想像に過ぎません。もし他に違つた古事があるなら、どうか教を仰ぎます。

動物の分布と黃海の海流

飯塚 啓

東京市外濠谷町南平臺47

渡瀬博士の紀念號出版に關する相談會の節、私は委員の方に何か憶出を書くことの御約束をして置いた責任上、茲に稿を起すのである。同博士は特に動物の分布に關して熱心に研究せられた學者であつた。従て今憶出を談るにしても、亦動物分布に關する事項が最も適當であると考へるのである。私も亦動物の分布に關しては、以前から調査を續けて居るが、嘗て黃海の海流と動物分布との研究旅行を終つて歸つた時に、同博士に其の談をしたら、同博士が面白いと非常に喜ばれたのを憶出して、夫れを書くのである。尤も此の事柄の摘要は或る同窓會の席上で談したことはあるが、未だ學術雜誌に發表したことは無いから、これが好い機會であると思ふのである。

地球上或る局部の海產動物竝に海產植物を研究する時は、其の局部に於ける、海洋の狀況を察することが出来るし、海洋の狀況を調査する時は、海產動物や海產植物の分布の有様を察することが出来るのである。従て海洋の調査は其の海洋中に生育する動物及び植物の研究には必要缺く可からざる事項であり、就中海流の調査は單に生物學上必要なばかりでなく、航海者や水産家は云ふに及ばず、本邦古代史、貿易史、文明史等を研究する人々には缺く可からざる事柄である。

海產動物と海流との關係に就て、私は嘗て海產動物分布の狀況に基づき、我國の沿岸を五部分に別けるのを適當と認め、其の各部分に於て各特有なる動物が棲息することを發表したのである（此の論文は東京帝國大學理科學部紀要第三十冊第二篇として明治四十二年出版）。

其の後私は朝鮮及び關東州の沿海の動物を調査して、臺灣方面より來る暖流性の海流が、朝鮮の西南端に近づいて二岐し、其の一は日本海に入り、他の一は朝鮮の西岸を北に流れて、黃海道の西南端に赴き、此處に其の方向を西北

に轉じて、旅順の南に沿うて遼東海灣に進入することを動物分布の研究上より認めたのである。併しこれを初めて讀む人は、朝鮮沿海は本問題外であると思ふかも知れないが、夫れは誤りで、此の前提があつたから、後に支那の東北沿海の海流と動物分布との關係が比較的容易に解決されたのである。

其の後私は臺灣竝に其の附近の嶋嶼に研究旅行をし、更に支那の山東省に赴き、黃海の海流と海産動物との關係を調査したのである。而して出來たのが次頁に附けた海流の圖である。併し此の結果を述べるに先つて、黃海及び渤海等に於ける海流に關する從來の説を一括して、記述して置くのが順序であると思ふ。

嘗て S. O. MAKAROF 提督は『北半球の内海には其の大小を問はず、時計の針と反對の方向に動く循環海流が存在する』との説を出して居る。其の後 BERGHAUS 氏の作製した海圖には、臺灣海峽を経て北流し、楊子江の河口より更に支那の東海岸に沿うて進み、山東高角に至りて屈曲して、東南に向ひ、朝鮮の濟州嶋の北を経て、日本海に入る海流が明かに記入してある。又 BARTHOLOMEW 氏の海圖 (1917 年版)、竝に同氏の海流圖 (1924 年 Geographical Institute of Edinburgh 出版) にも、臺灣海峽より支那沿岸を北流し、山東高角より東南に轉流し、濟州嶋附近から朝鮮海峽に向ひ、「黑潮」の支流と合同して、日本海に入る海流が明記してある。又嘗て仁川の測候所長であつた和田雄治博士が、大阪毎日、東京日日兩新聞社の後援を得て、海流調査の爲め、標識壱を放流して得た結果を三回に別けて報告して居るが、其れによると『臺灣方面より來れる暖流性の海流は、濟州嶋の沖に至りて二岐し、其の一は日本海に進入し、他は朝鮮半嶋の西岸に沿うて北進し、黃海道西岸を過ぎ、更に進んで旅順の南方を経て渤海灣に入り、此處に方向を轉じ一週して山東省の東端なる山東高角に赴き居れり。』と、是れ迄は從來私が調査して得た結果と大略相等しいから別に異論は無いが、さて夫れから後は、『其の海流は更に山東高角より方向を南東に變じて北緯三十六度、東經百二十三度半位の邊に至り、此所より方向を南にとり、後、僅かに西南に轉流し、遂に北緯三十一度、東經百二十四度、即ち楊子江の河口と、我が肥前五嶋との中間より、稍々南の所より東流となり、更に南流し北緯三十一度、東經百二十五度の邊に於て更に西南西の方向を以て進み、浙江省黒山列嶋の附近に至り、夫れより浙江省、福建省の東岸に近く南下する』との結論である。而して山東省の東南岸より江蘇省の東岸の海流に關しては一言も述べて無いのである。

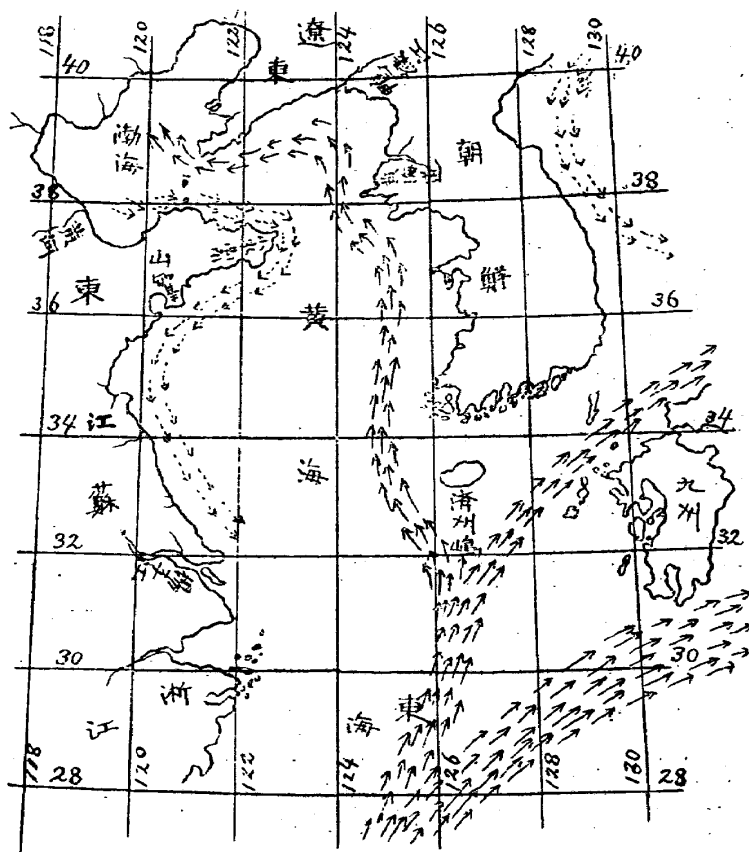
私は七、八兩月に互つて此の方面の海産物物の分布状態を實際に調査研究中に、はしなくも以上の諸説に對して疑問を抱くに至つたのである。即ち前述の BERGHAUS 氏や BARTHOLOMEW 氏などに據ると、支那の東岸に接近して、暖流

性海流があつて、北に向て流れて居るのに、和田博士の得た結果によると楊子江の河口以北には何の海流も記入せられて居らず、反つて楊子江の河口以南には、南方に向て流れる海流が記入せられて居ることである。

海産動物分布の方面から観る時は、濟州嶋から黃海道の西南端迄を一區域とする。而して夫れから北に進み、更に西に向ひて遼東半嶋附近迄が又一區域となるのである。ところが桑野久任理學士が先年支那北京に居られた際、山東省の北海岸に於て採集して送られた動物を私が研究して、其の結果山東省北沿岸の海産動物と、遼東半嶋附近のものとは同種類のものが澤山あり、其の動物相が頗るよく似て居ることを認めたのである。されば遼東半嶋附近から、山東省北沿岸へかけては、これまた動物分布上の一大區域をなして居ることを認めるのである。

是より進んで山東省の北岸に沿うて東に向ふ海流と、楊子江の河口より北進すると號する海流との本質を明らかにせんとするのである。私は此の目的を以て更に調査の歩を進めて、青嶋を基點として南方に向ひ、又北方へ向つて研究を續けたのである。話は少しく前へ戻るが、始め東京出發の際に 大迫尙敏大將から、時の青嶋軍司令長官宛の紹介狀を頂いて行つたのである。さて長官が云はれるには『青嶋では冬期になると、魚の刺身が喰へなくつて困るが、何とか好い工夫はあるまいか』と云ふ事であつたから、私は『夫れは研究の上でなければ何とも申上ることが出来ません』と答へて置いた。夫れから軍司令部の命令で、小蒸汽船の扇海丸、千代丸などを出して呉れたり、其の他種々の便宜を與へて呉れた。

此の沿岸で採集したる海産動物を調べて見ると、前述の通り之は恰度山東省の北沿岸に



棲息する動物と甚だしく似て居り、且つ同種類も少くなかつた。即ち寒流性の動物であつた。夫れから一方に於ては海水の溫度、海藻生育の状況等をも調べて、山東高角の左右に於て、種々の條件が相似て居る以上は、必らず渤海灣から山東高角を廻り、山東省の東海岸に沿うて南に進む海流が無くてはならないと云ふ事になる。青島が夏期に於て涼しく、有名なる避暑地であると云ふ事は、此の沿岸に南進する寒流性の海流があるのが其の一原因と考へた。従つて BERGHAUS 氏の記する所は疑はしくなつた、否全く事實とは反對である。然らば和田博士の説は如何と云ふに、同博士が前述の如く、寒流性の海流が山東高角から、方向を東南にとつて、支那の海岸を離れて流れると斷定したのは、山東高角以南の支那沿岸には標識蠟が漂著したと云ふ報告に接しないからであると云ふて居るが、併しこれは甚だ當てにならないのである。何故ならば此の邊の支那人が標識蠟が漂著したのに氣が付かないか、或は氣が付いても其の儘にして置いたのであるかも知れないからである。

私は青嶋に於て冬期になると、刺身にするやうな魚の捕獲が無くなるのは、全く前述の通り、渤海灣の方から來る寒流性の海流が冬期になると、一層寒冷となり、且つ其の強さを増して、山東省の東海岸に沿ふて、南へ流れるからであると斷定したのである。夫れ故に若し青嶋海岸から五十裡から、百裡も沖へ出たならば、冬期に於ても屹度相當の魚族が、捕獲せられるに相違ないと考へて、其の旨を軍司令部へ答へて置いて、斯くの如き次第であるから、來る可き冬期に至らば、試験の爲めに、少くも一週間位の食料を貯へ、且つ捕獲魚族をも適當に貯藏し得る程度の漁船を出して、此の海岸を距ること、百裡内外の場所に於て、漁業に従事させることを希望したのである。而して幸に之が成功すれば、一方に於ては冬期に於て、内地から鮮魚を送らなくとも、相當に魚類の供給が出来るし、他方に於ては此の地方の住民に、冬期に於ける新しい職業を與へることが出来る。即ち一舉兩得であることを説いたら、軍司令官殆め總務課長も大いに喜んで、冬期になつたら是非其の調査を行はせたいとのことであつた。

其の後數日を経て、私の説を立派に裏書きする話を聞いたのである。夫れは其の前々年の十二月の出來事であるが、青嶋から出た船が、一週間を經過しても、未だ歸つて來ない、何の消息もない。或は難船したのかと、皆々心配して居る時に、其の船が漸く歸つて來た。聽けば青嶋を距ること八十裡許の沖に於て、鯛を始めとして種々の魚類が澤山居たから、捕つて來たと云ふのであつた。

以上に述べて來た事實を綜合して見ると、和田博士が例の寒流性海流が、山東高角から方向を東南の沖合にとると云ふのも、亦頗る疑問となつた。恐らく同博士は支那の東海岸から、標識蠟の漂著に關する報告を得なかつたのと、前